

---

# 笑顔の代わりに道化の仮面を

浅月 比良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑顔の代わりに道化の仮面を

### 【Nコード】

N4160U

### 【作者名】

浅月 比良

### 【あらすじ】

僕が帰宅するとそこには地獄が広がっていた。家族は皆殺しにされ、家族を殺した男は僕に言う「死ぬのが怖いか？」と。僕はこの男に復讐することを決意した。

そして、七年が経ち僕は力を手にした。人を殺せる力だ。しかし、力を手に入れた代償として組織に使われる毎日を送っている。そんなある日、一人の女の子と出会う。

## プロローグ

目の前に広がる光景は赤色で塗りつぶされたりビンゴ。倒れているのは三人。

両親と妹。

三人とも血まみれだった。

そして、唯一立っているのは一人。

知らない男だった。

銀色を思わせる白髪に、黒一色の服装。

そして、血がべったり付いた日本刀。

その瞬間僕は冷や汗がどっと噴き出た。

逃げなきゃ、と生存本能は命令するけど体は金縛りにあったように動けず、声すらでない。

男はそんな僕に気付いて一言こう言った。

「死ぬのが怖いか？」

ブルルルルルルルルルルル……

携帯電話の着信音で目が覚めた。携帯のディスプレイには「二岡」と表示されていた。

「もしもし」

「おはようございます、二岡です。朝早くから申し訳ないのですが、仕事の依頼です」

「昨日の内に言っておいてくれよ」

「私も先ほど言われましたので、文句は上に言ってください。では、今から迎えに上がりますので、準備をお願いします」

そう言って、電話が切られた。

手早く準備を終え、二岡を待つ間さつき見た夢のことを思い出していた。

七年も経つのにまだ鮮明に脳裏に焼き付いて、僕を過去に縛りつける。

あの時もっと早く帰っていたら……

あの時もっと自分に勇気があつたら……

あの時もっと自分に力があれば……

ピンポーン

ドアを開けると二岡がそこにいた。

「迎えにあがりました。準備は万全ですか？」

「ああ」

「では今日も張りきって参りましょうか」

二岡は満面の笑みで続きを口にした。

「人を殺しに」

## 第一章

あの日、家族が皆殺しにされた日、銀髪の男が去った後、二岡が現れた。

二岡は言った。「我々の組織に入りませんか？」と。組織に入れば、強くなれること。これから家族がいなくても生きていけること。何より銀髪の男に復讐できることを説明された。

今の僕には力が無い。しかし、組織に入れば力が手に入る。それだけで十分だ。復讐できればその先のことは知ったことではない。僕は二つ返事で了承した。

そして、それまでの生活と自分の名前、さらに人であることを捨てた。

今名乗っている三神みかみ 行こうという名前も組織から与えられたものだ。初めの五年間は徹底的に殺人術を叩きこまれた。

そしてここ二年は実際に人を殺めている。組織の命ずるままに人を殺す。

僕は殺人鬼だ。

それでも構わない。

全ては復讐のために。

「三神君どうかしましたか？」

二岡の声で現実に戻された。

今は二岡の車に乗せられて、目的地に向かうところだ。

「いや、別に。それより今日の仕事を具体的に教えてくれ」

「はい。今回は、ある女性が襲われているところを三神君が助けに入るという王子様的なお仕事です」

「なんだそれ。いつもとは違う感じだな。敵の数や特徴は？」

「私も詳しいことはわかりません。臨機応変な対応をせよとのこと  
です」

「下っ端は何も知らず、上の指示通りに動けっつて訳だ」

「あ、それと女性は絶対に傷つけるなど失敗はするなど注文されま  
した」

「りょーかい」

それから数分して車は停車した。

「着きましたよ」

半壊した高級車が道を塞いでいた。

そして、スーツの男が血まみれで倒れていて、朝の通勤や通学の  
人達で人だかりができていた。

そこから血の跡が路地裏に点々と続いていた。

「どつやら路地裏の方に行っただみたいですね。しかも結構やばい感  
じです。三神君急いでください。今回の仕事は失敗できないですか  
ら」

持ってきていた鞆からナイフを数本とピエロの面を取り出した。

そして、ピエロの面を付けて僕は答える。

「わかってるよ。じゃあ二岡はここで待っててくれ」

僕は走り出した。

血の跡を追い、角を曲がったところで目的の人物らしき人を見つ  
けた。保護対象の女性の顔を知らないから、おそらくだけど。

他には男が四人。

さつき見たような血まみれのスーツ男一人と立っているのが三人だ。

立っている三人は大柄な男と細身の男、それに金髪の男だ。つまり、あの三人をキルすれば良い訳だ。僕はポケットから折りたたみナイフを取り出した。

「近寄らないで、気持ち悪い」

「生意気な小娘だな。こいつ殺していいか？」

「いや、生きたまま連れてこいとこの命令だから殺しはマズイ」

「じゃあ死なない程度なら良い訳だ」

「急げよ」

「了解」

女性は恐怖で凍りついて身動きが取れない。それをあざ笑うかのように大柄な男がゆっくり女性に近づく。

しかし、僕は見逃さなかった。男の背中がガラ空きなのを。

ザクッ

全速で男との間合いを詰め、背中にナイフを突き立て、素早く抜く。

大柄な男は倒れ、血の池を作っている。もう立ち上がることはできないうらう。

残りは二人。

細身の男に向け握っていたナイフを投げつける。

ヒュッ

男の額に深く刺さり、倒れた。残り一人。

金髪との間合いを詰め、その喉に二本目のナイフを突き付ける。

「ピエロの面のナイフ使い。お、お前……狂った道化師か」

「お前は誰の命令で動いている？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ。なんでも答えるから命だけは勘弁してくれ」

「二度目はない。答える」

僕は低い声でそう言い、ナイフをさらに近づけた。

「あ、ある企業から頼まれたんだよ。その女は四条本家の娘だからなるほど。四条グループと言えば、日本最大の銀行 四条銀行を中心とした大財閥。金融業界だけでなくありとあらゆる業界に子会社や孫会社を持ち、グループ全体で日本経済の五分の一を担っているという噂もある。

大企業だけに色んなところから恨まれているわけだ。

ついでに言えば、血まみれだったスーツの男二人は、お嬢様をお守りするボディガードってところか。

「質問を変える。白髪に黒い服、日本刀を持った男を知っているか？」

「モノクロのことか？」

「そうだ。知っていることを全て話せ」

「フリーの殺し屋だってことしか知らねえよ。ほ、ほんとだって。もういいだろ。逃がしてくれよ」

僕の知っている以上の情報は得られないみたいだな。

ナイフを折りたたみ、ポケットにしまった。

「油断したな。死ね！」



金髪は僕から離れて、こっちに手榴弾を投げてきた。

そして、爆発が起きた。

爆音は周囲にまで響き渡り、あたりは煙で覆われた。

「これでピエロ殺しとして、俺も有名になれるぜ。ざまあねえな」  
「遺言はそれでいいのか？」

「お、お前なんで生きて……うっ」

金髪の心臓を一突きにした。

「悪いけど、僕はまだ死ねないんだよ。どんなにこの手が血に染まったとしても。どんなに僕自身が狂ったとしても。」

叶えたい願いがあるから。

心の中でそう呟いた。

これで今回の仕事は終わりだ。

僕はその場を急いで離れた。危険が去ったから保護対象を放置してもかまわないだろうと判断した。というか、あまり人と関わりたくない。

小声で「ありがとう」と聞こえた気がしたが気のせいだろう。どこの世界に殺人者に感謝する人間がいるんだ。まあどこの世界でも僕は存在してはいけないうちだろうと思うけど。

「お疲れ様」

僕はその声で振り返った。振り返らなくても誰かはすぐにわかっ

たけど。

振り返ったそこには女の子が立っていた。

「七実さん。久しぶりですね」

七実さんは僕に殺人術を叩き込んでくれた師匠だ。綺麗な容姿とは裏腹にめちゃくちゃ強い。年は僕より二つ三つ上だろうが正確な年齢は知らない。というか彼女については、ほとんど何も知らない謎の多い女性だ。

「最近仕事する気にならなくて、ずっと学校に通ってたからね」

「七実さんって学生だったんですね。大学ですか？」

「私はまだ高校生だ。君と一つしか変わらない。私ってそんなに老けて見えるのかしら？」

顔は笑顔だが、ものすごい殺気を感じる。ここで下手なことを言ったら殺されるな。

「い、いや七実さんから大人の魅力が溢れているので二十歳ぐらいだと思つてました」

「まあそういうことにしといてあげるわ。それより、まだその仮面使ってたのね」

「ええ。顔が隠せますし、七実さんからもらったものですから」

僕の使っているピエロの面は七実さんからもらったものだ。笑わない僕にピッタリだからということらしい。素顔が広まるのは僕も避けたいので、せつかくだからと愛用している。

いつからかそんな僕に狂った道化師マッドピエロという二つ名が付いた。

笑顔で殺人を楽しんでいるように見えるのが語源らしい。

「今のセリフはなかなか高ポイントね。やるじゃない」  
「はあ」

「じゃあ私は学校に行くわ。またね」

「はい。ではまたどこかで」

「またすぐに会えると思うけどね」

そう言っ七実さんは去って行った。

僕も二岡が待っている車に戻った。

「お疲れ様です。三神君」

「ああ」

「帰って早々悪いんですが、次の仕事です」

「また？ 今日はずいぶん忙しいな」

「多分三神君が思っている以上に大変ですよ」

「仕事の内容は？」

「その前にまずこれに着替えてください」

そう言っ二岡は学生服を取り出した。

その瞬間七実さんのセリフを思い出した。

七実さん、確かに再会は早そうです。

## 第二章

「三神 行です。今日からよろしくお願いします」

そう言つて、担任から指定された席に座つた。

僕は高校に編入したのだ。

僕の年齢は今年十七歳になるので、常識的に考えれば特に変わったことではない。

しかし、僕は組織に入つてからは学校に通っていない。

自慢じゃないが最終学歴は小学校中退だ。

学校とか人の多いと場所はあまり好きくないが、仕事なので割り切ることにした。

「三神君は海外生活が長くて、日本のことはよくわからないので、皆手助けしてやってくれ。以上HR終わり」

海外にいたという設定はもちろん大嘘だ。

まともな学生生活を送っていない僕に対する組織の配慮だ。

この高校編入に関しては組織の力がかかなり介入されているらしい。

それだけ、次の仕事は重要なのだろう。

そんなことを考えながら教室を出る担任を見送っていると、クラスマートフォンに取り囲まれた。

「ねえ三神君つてどこの国にいたの？」

「親の仕事つて何してんの？」

「日本料理は何が好き？」

「彼女とかいるの？」

……  
……

質問攻めにあつた。

僕の人間関係は圧倒的に狭いので、こういう時の対処はわからない。

正直、逃げ出したかった。

よし。いつそ逃げよう。

そう思ったところで人垣をかき分け一人の女子が入ってきた。

「みんな、三神君が困ってるじゃない。ね、三神君？」

いや、僕に振られても困るんだけど。

僕がとりあえず何か話そうとしたところで、教師が入ってきた。それに気づいた生徒はみな自分の席に帰る。

助かった。

去り際に、僕を助けてくれた女子が話しかけてきた。

「私、四条夕飛。よろしくね」

「よ、よろしく」

彼女はニコツと笑い席に戻った。

実は彼女の名前を僕は知っていた。

というか、朝助けた女性である。

もちろんこの再会は偶然ではない。

必然である。

それというのも次の仕事も彼女絡みなのだ。

次の仕事は、

四条夕飛を護衛すること。

ただし、彼女には僕の正体を気づかれないように。

正直、面倒くさい任務である。学生をするだけでも大変なのに、

対象に気づかれずに護衛なんて大変なことこの上ない。

授業が始まった。

ろくに学校に行っていない僕に理解できるわけもなく、授業は退屈だった。

仕方ないので授業を軽く聞き流しながら、前方の席にいる四条夕飛を観察することにした。

彼女は真面目にノートを写しているようだ。

すると、後ろから肩を軽く叩かれた。

振り返ると、僕の後ろの席に座っている男子生徒が小声で話しかけてきた。

「転校生も四条さん狙いなのかな？　彼女は倍率高いぜ」

「別にそんなんじゃないさ」

「彼女は、二年の中でも一番の美人だからな。狙っている奴も多い。なんせあの容姿だからな。それに頭も良くて、性格も良い。運動は少し苦手なようだけど、完璧じゃないところが良いつて奴も大勢いる。ただ悲しいかな。俺たち凡人と彼女の間には大きな壁があるのさ。わかるかな？」

「さあね」

「家柄だよ。彼女は日本有数の大財閥　四条　の令嬢。しかも、現当主の愛娘なのさ。よって、俺たちは陰から彼女を見守るしかないってわけ」

「詳しいな」

「まあね。俺は彼女のファンクラブの会長だからな。自己紹介がまだったな。俺は、四条夕飛様ファンクラブ会長、佐藤。よかったら転校生もファンクラブに入らないか？」

「遠慮しとく」

「そうか、気が変わったらいつでも言ってくれ」

どうやら佐藤という男はよくしゃべるタイプのようだ。

僕とは全く違う。

いや、この空間にいる僕の方が異質なのか。

殺人鬼のくせに普通の生活を送るなんて。

多くの人を殺してきた僕に普通の生活を送る資格なんてあるはずもないのに。

学校に来て良い訳ないのに。

昼休みになった。

唐突に、僕がいる教室に七実さんがやってきた。

クラスメートはみな驚いているようだ。

僕はというとなんとなく、この高校に七実さんがいるのではないかと予想していたのでそれほど驚かなかった。

「コウ、一緒にお昼を食べよう」

七実さんはそう言って、僕の腕を引っ張っていった。

「七実さん、どうして僕のところに来たんですか？」

「なんとなくそんな気分だから」

さすがの気まぐれだ。

「僕、護衛の仕事があるんですけど」

「学校は安全だから大丈夫」

じゃあ、僕が学校に来る必要なかったのでは？ と思ったが深く考えても仕方ない。

そして、学食で一緒にお昼を食べた。

七実さんから学校生活のアドバイスをもらった。

学食にいた大半の人がこっちを見ていた気がする。

一体、なんなのだろう。  
その理由は教室に戻ったらわかった。

教室に戻ると佐藤を始めとするクラスメートたちに囲まれた。

「転校生、椿うきはき 七実先輩ななみとどういう関係だ？」

声をそろえて聞かれた。

どうやら、七実さんは学校での有名人らしい。

とりあえず、七実さんとは遠い親戚ということで誤魔化した。  
本当に学校は疲れる。

そして、放課後。

四条夕飛は部活はやっていないらしく、授業が終わるとすぐに教室を後にした。

普段は、登校も下校も高級車での送迎だったらしいのだが、今日の朝に運転手が殺されたのでこれからは徒歩で登下校するらしい。

だから、僕は彼女に気づかれないように一定距離を開け、後を追った。

一応、護衛という大義名分はあるが、やっていることはストーカーと同じである。

この仕事は本当に僕に合っていない。

人選ミスだと言っても過言じゃない。

帰ったら、二岡に文句を付けよう。

三十分ぐらい歩き、ようやく彼女を家まで見送ることができた。

これで今日の仕事は終わりだ。

明日からの日々を想像し、うんざりしながら僕も家に帰った。



### 第三章

家に着くと、まず二岡に電話した。

「はい、二岡です」

「なあ二岡。今の仕事を降りることはできないのか？」

「どうしてです？」

「僕には向いてないと思うんだ。七実さんの方が適任だろ？」

「なるほど。しかし、三神君を選んだのはちゃんと理由があるんですよ」

「どんな？」

「三神君の追っている男が、四条さんを狙っているという情報があったからです」

思わず、携帯電話を握る手に力が入った。

ずっと探していた男

モノクロと呼ばれる男

銀色を思わせる白髪に黒一色の服

そして、日本刀

ついに……この時が来た。

「わかった。今の仕事はこのままでかまわない。また何かあったら連絡をくれ」

次の日も、朝から四条夕飛に張り付いていた。

僕は昨日よりも神経をとがらせていた。

いつ、奴が現れるかわからない。

すると、四条の前に一人の男が現れた。  
奴ではない。

しかし、異様な雰囲気を持つ男だ。  
瞳の色が青いことも不気味である。

僕はピエロ面を付け、青い目の男と四条の間に入った。

青い目の男は無言で襲いかかってきた。

右手には、サバイバルナイフが握られている。

僕は左手で、男の右手首をつかんで、動きを止める。

しかし、男の力は想像以上に強い。

やばい。押し負ける。

僕の左肩をナイフが削り取る。

僕は右手で肩の傷を抑えながら、間合いを取った。  
力では僕の方が、分が悪いみたいだ。

それなら、スピードで勝負だ。

ナイフを取り出し、男の心臓めがけて最速の突きをくりだす。

男は、僕のナイフを素手の左手で受け止める。

ナイフは男の手の平に突き刺さり止まった。

そして、男のカウンター。

僕の首筋に向かってナイフを振るう。

紙一重でそれをかわす。

しかし、ナイフの切っ先がかすり、首から血が垂れる。

なんとか、致命傷は避けられたが、次は危ない。

この青い目の男相当強い。

パワーもスピードも僕と同等か、それ以上。  
しかし、テクニクには欠ける気がする。  
それなら……

僕は左手にもナイフを持ち、もう一度、男に突進した。

そして、右手のナイフで突き。

また、男は左手で受け止めた。

男のナイフが僕を襲う。

しかし、そのナイフを持つ手を僕は蹴りあげた。

ナイフは吹き飛び、その間に左手のナイフで男の心臓を一突きにした。

男は倒れた。

僕は大きく息を吐き、辺りを見回し、誰もいないことを確認した。  
どうやら、四条は逃げ去ったらしい。

人込みでは目立つのでピエロの面ははずし、そこから立ち去った。

歩きながら、鞆に入れていた医療品で応急手当をした。  
特にケガはひどくないから、制服で誤魔化せるだろう。

結局学校に着くまでに四条の姿は見なかった。

教室にも姿は見当たらなかったが、僕が来て数分して彼女も教室に入ってきた。

とりあえずは無事らしい。

午前中は特に変わったことは起きなかった。

昼休みになる。

七実さんの襲撃に気を配っていたら、思わぬ人物から声をかけられた。

「ねえ、お昼一緒に食べようよ」

四条夕飛だ。

教室がざわめいた。

学校のアイドルが男をお昼に誘ったのだから、珍しいことなのだろう。

僕がどう答えるべきか考えていると彼女は歩き出してしまったので、仕方なくついて行くことにする。

屋上に着いた。

先客はいないようだ。

「それで、僕になんの用なんだ？」

「三神君ってせっかちだね。生き急いでいるのかな。いや、死に急いでいるという方が近い感じだね。まあいいわ。私の話は今朝のことよ」

僕はその言葉に冷や汗が出た。

「なんのことかな？」

「とぼけなくて良いよ。全部知ってることから。というか私が仕掛けたことだしね」

「……………」

「護衛のこと、組織のこと、椿七実先輩のこと……あとは、君の生い立ちとかね。川上<sup>かわかみ</sup> 行人君<sup>いくと</sup>」

胸がえぐられるような感覚に陥った。

目眩がする。

吐き気がする。

キモチワルイ。

ソノナマエデ、ボクヲヨブナ。

「その名前で僕を呼ぶな」

「気に障った？ ごめんね。悪気はなかったの。あなたのことを知  
っていることを証明するために必要だったから」

「君が全部仕掛けたというのはどうということだ？」

「組織に私の護衛を頼んだのは他の誰でもない私。しかも、あなた  
を指名してね」

「どうして僕を？」

「それはまだ言えないわ」

「じゃあどうして護衛を？」

「そう、それ。そのことでここに来てもらったの。私は今、いろん  
な企業から命を狙われているの。その企業の多くはお父様に恨みを  
持つ者ばかりなんだけど」

「まあ大財閥なんだから、恨みなんて一つや二つどころじゃないん  
だろうな」

「そうゆうこと。そこまでは私も良いとしましょう。四条に生まれ  
た宿命だから仕方ない。けど、昨日の一件はさすがにまずかったわ  
ね」

「昨日の三人組か？」

「そう。私に付けてた護衛が二人もやられちゃったからね。三神君  
がいなかったら、危ないところだったわ。ありがとうね」

「本当は君のシナリオ通りだったんじゃないのか？」

「その根拠は？」

「昨日の三人組は別に大した強さじゃなかった。それなのに大財閥  
の護衛ともあろうものが簡単に二人もやられている。変じゃないか

？」

「そうかしら？」

「それにウチの組織への依頼のタイミングが良すぎる。まるで、襲われるのがわかっていたみたいに」

「襲われてから連絡したのよ」

「仮にそうだとしたら、助けが間に合わなかっただろう。つまり君は、あの朝奴らから襲われるのを知っていたにも関わらず、意図的に素人のような護衛しか付けなかった」

「なんのために？」

「僕を呼び出すためだろ」

そこで、四条は大きく息を吐いてから答えた。

「正解。おみごとね。さすが三神君なかなかの洞察力ね。確かにそこまでは私のシナリオ道理だったわ。あなたがこの学校に来ることもね。けど、今日から事情が変わったの」

「それが、僕をここに呼び出したことに繋がるわけね」

「理解が早くて助かるわ。昨日の一件を知ったお父様が対策を打つたの。最悪の対策をね。繰り返すけどやっぱり、護衛が二人も殺されたのはまずかったわね」

「その対策って？」

「お父様が打ち出した対策は、期限以内に私をさらったものを、四条の後継者つまり私の旦那様にするというものよ」

なるほど。四条の後継者になれるのであればライバル企業には多大なメリットになる。しかも、若くて綺麗な嫁のおまけ付きだ。確かにこの方法ならどう転んでも娘の命が狙われることはなくなるな。

「強引なやり方ではあるが、命を守る方法としては確実だな」

「冗談じゃないわ！ 私の旦那様は私が決める。こんな強引なやり

方で決められてたまりますか。こんな方法で守られるぐらいなら死んだ方がマシよ！」

親の心子知らず、なのかな。

「そこで、お父様に条件を突き付けたわ。今日から三日間、私が誰の手にも渡らなかつたら、私の結婚相手は私が決めるってね」「なるほど」

「てことで、今日から三日間私を守ってね、三神君。守って、守って、守り抜いて。私の自由のために」

とりあえず、僕の感想を言わせてもらおうと、

事態が好転したか、悪転したか微妙だな。

## 第四章

四条の話を頭の中で整理してみる。

四条夕飛は、父親のライバル企業の多くから命を狙われている。それを見かねた四条父は対策として、娘を賞品としたゲームを打ち出した。

ゲームの内容は、「三日以内に娘を奪うこと。娘を奪った者には、娘と四条グループの後継者になる権利がもらえる」

夕飛の命を守るためにはなかなか良いアイデアだったが、当の夕飛本人は、結婚相手は自分で決めたいと思っている。

そこで、僕に三日間あらゆる敵から身を守れということか。

二岡の話では、四条を狙っている者の中にあの男もいるらしいので、僕に断る道理はない。

しかし、なぜ四条は僕を選んだのかは気になる。

四条のシナリオでは、このゲームがなくとも僕を自分の護衛にするつもりでいたらしいからな。

まあいいか。

僕の野望はあくまで復讐だ。

復讐さえできれば、四条の操り人形でも構わないさ。

昼休みを終えるチャイムがなった。

どうやら思いのほか、四条と話し込んでいたらしい。

話に夢中で二人とも、昼ご飯は食べそびれてしまった。



「じゃあ細かいことはあとで。とりあえず、学校で襲われることはないようにルールで縛ってあるから、安心して学校生活を楽しむといいわ。さて、教室に戻りましょうか」

二人で教室に戻った。

すると、昨日のように佐藤を始めとするクラスメイトに囲まれた。そして、佐藤が僕の肩をがっちり掴んで、口を開く。

「おい、三神。昨日は椿先輩で今日は四条様とランチ。お前はどんなに幸せタイムを過ごす気なんだ。我らのアイドル四条様を独り占めする気か？」

まあ正確には昼飯食べてないんだけどね。

どうやって、誤魔化そうか考えていると、隣にいた四条が僕の代わりに答えた。

「私のファンクラブの方たちには申し訳ないんだけど、今日から三神君と付き合うことになりました」

「「「「えーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」」」」

クラスにいた全員の絶叫。

僕も驚きを口に出しかけた。

普段あまり感情を顔に出さない僕が、この時ばかりは驚いた表情

をしていたことだろう。

「椿先輩とは親戚で、四条様が彼女……」

「三神がこんなに恐ろしい奴だとは」

「転校二日目にして、我らの女神様を落とすなんて」

「私のお姉さまを奪うなんて許せないわ！」

「三神コロスコロスコロス……」

クラスのいたるところから不吉な言葉を耳にした。

どうやら、転校二日目にしてクラス中を……主に男子を敵に回したようだ。

クラスメートの殺気を感じながら、冷や汗を流す。

そこに四条が助け船を出した。

「どうか私達のこととは温かく見守ってください」

四条は満面の笑みで、そう言った。

その笑顔にクラス全員ジェノサイドされた。

まさにジェノサイドスマイル。

その笑顔で、クラスメートの殺気は収まり、ほわほわした雰囲気  
がクラスを満たした。

「すまん、遅れた。じゃあ次の授業を始めろぞ」

遅れてきた次の授業の教員が入ってきた。

もちろん次の授業は、クラスにいた全員が授業どころではなかったのは言うまでもない話だ。

噂はすぐに広がり、同級生だけでなく、上級生や下級生までウチのクラスを見物しに来た。

僕は恐ろしいスピードで学校の有名人になった。

平和だなあと思う。

最近はずっと、殺さなければ殺される世界で生きてきたから、違和感がある。

もし、あの時家族が殺されていなければ、こんな生活を毎日送っていたのかもしれない。

もし、あの時組織に入らなければ、死に溢れた毎日を送っていなかったのかもしれない。

あの男さえいなければ……

「三神君一緒に帰る」

放課後になり、四条が来た。

そして、僕の腕に自分の腕を絡め歩き出した。

僕は、四条に引っ張られるまま歩き出した。

「そついえば、お昼食べ損ねたから何か食べて帰ろうよ。私奢るよ」

僕らは誰がどう見てもカップルにしか見えなかったことだろう。

というか、カップルのフリをする必要はあったのだろうか？

確かに護衛はしやすくなった気はするけど。

まあいいか。

僕の復讐の邪魔にならなければ、あとのことはどうでもいい。

## 第五章

「お嬢様がファミレスでハンバーグとは意外だなんて顔してるね」

僕たちは下校途中でファミレスにより、遅めの昼食もしくは早めの夕食を食べている。

「別にそんな顔はしてないけど」

「だよ。適当に言ってみただけだし。ていうか、三神君表情変わらないよね。無表情って、疲れない？」

「愛想笑いを振りまいてるよりは良さ」

「それって遠まわしに私のこと非難してる？」

「想像に任せるよ」

「ひどいこと言うのね。笑顔は私の処世術なのに」

「戯言はもういいだろう。それより、どうして僕たちが付き合っていることにしたんだ？」

「私たちが二人でいても自然なようにするためよ。迷惑だった？」

「迷惑ってほどではないな。僕にとっては、どうでもいいことだし。けど、事前に言っておいてもらわないと困るな」

「そう。じゃあ次から気を付けるわ」

「それより、今後どういった方針で行くんだ？」

「男の人って仕事の話ばかりなのね。二人の時はもっと楽しい話したいのに」

「僕たちは楽しい話をするような間柄じゃないだろう」

「それは残念ね。まあいいわ。とりあえず、学校と家にいるときは襲ってはいけないってことになっているから、四六時中一緒にいる必要はないわね」

「なるほど。じゃあ、残りの時間ずっと家にいたら良いじゃないか」

「冗談じゃないわ。そんな卑怯な手で勝っても全然嬉しくない。目

指すは完全勝利よ。それにあなたの復讐も達成できないわ。それは困るでしょ?」

「確かに。けど、明日は土曜日、明後日は日曜日。学校は休みだぞ?」

「そうね。休日ね」

「どうするんだ?」

「愚問ね。もちろんデートに決まってるじゃない。私達恋人なんだから」

「設定ではな」

ガラスの割れる音がファミレス内に響いた。

「キャーーーーー!」

女性店員の悲鳴も遅れて響く。

「なんだあいつ!」

「不審者だ。誰か警察呼べ!」

「怪我人もいるぞ!」

ファミレス内が騒がしくなってきた。

どうやら不審人物が窓ガラスを破って店内に侵入してきたようだ。

騒ぎの中心を見やると、そこにはアロハシャツの男が立っていた。その男に見覚えはなかったが、何か違和感がある。いったい何がおかしいんだ?

アロハ男と目があつた。

その瞬間、違和感の正体に気づいた。

「逃げるぞ四条」

「え、なんで？」

「奴は朝襲ってきた連中の仲間だ」

「どうしてわかるの？」

「いいから急げ」

僕は四条の手を掴み走り出した。

僕の違和感の正体それは

アロ八男の目が青いことだった。

見た感じ明らかにアジア系なのに瞳の色が青いなんて不自然である。

今朝の男もそうだった。

そして、今朝の男の異常な身体能力の高さ。

さらに異様な雰囲気も感じる。

おそらくあの青い目が何かしら関係している。

どちらにしても人目の多いここでの戦闘は避けるべきだ。

よって、逃げの一択である。

僕達は人気のない公園に着いた。

後ろを確認するが、アロ八男の姿は見えない。

「逃げ切ったの？」

「わからん。日も暮れてきたから油断はするなよ」

「あなたがいるから大丈夫よ」

ヒュン。

僕の顔の横に何かが通り過ぎた。

頬から血が流れる。

何かか飛んできた方向に目を向けるとアロ八男がいた。

手にはサイレンサー付きのハンドガン。

「四条、下がってる」

僕はポケットからナイフを取り出す。

日も沈み暗くなってきた中で、銃弾を避けつつ逃げるのは難しい。

殺るしかないか。

普段なら、相手の視線と銃口の向きに気を付けていれば銃弾を回避するのは容易い。

しかし、暗くてそれも難しい。

そして、気になるのはあの青い目。

朝の男と同じぐらいの身体能力を持っていると仮定するなら、かなり分が悪い。

でも、それでもやるしかない。

僕はナイフを持つ手に力を込め、アロ八男に突進していく。





## 第六章（前書き）

前回の更新から一カ月以上も経ってしまいました。

なるべく更新の間隔が空かないように気をつけたいです（笑）

## 第六章

アロ八男がハンドガンで迎撃してくる。

僕はそれを五感と直感でかわす。

全てをかわすことはできないが、致命傷となるほどではない。

僕の間合いまであと少し。

ガッ！

僕は2、3メートルぐらい飛ばされた。

視界がゆがむ。

口の中から血の味がする。

どうやらアゴに蹴りを食らったみたいだ。

ハンドガンで照準を合わされる気配を察知し、立ちあがった。

一足飛びで後ろに下がり、一気に間合いを開けた。

敵からの銃撃をかわしながら思考を巡らせる。

アロ八男は遠距離からは銃撃で、近距離は蹴り技の攻撃をしてくるようだ。

しかも蹴り技のスピードと威力は並外れている。

素人ではないな。

朝の敵は身体能力の高いチンピラという感じだったが、このアロ八男はおそらくプロだ。

身体能力では僕の方が分が悪い。

僕とて組織に入ってから、地獄の淵が見えるぐらいの鍛錬をしているのに関わらず、スピードとパワーでは勝ち目がない。

おそらくあの青い目に何かタネがあるのだろう。

まあいい。

今考えるべきはどうして奴らが化け物じみた身体能力を有しているのかではなく、どうやって勝つかだ。

僕は学生服のポケットからある物を取り出し、それを投げた。

辺りは轟音とまばゆい光に包まれた。

僕が投げたものはスタングレネードだ。

殺傷力は皆無だが、音と光で相手の隙をつくる道具。

再度間合いを詰め、右のナイフで突きを繰り返す。

サクッ

浅い。

僕のナイフは男の左腕をかすめただけだった。

アロ八男はスタングレネードの効果で目も耳も使えない状況で、勘だけで回避した。

アロ八男の反撃の蹴りがくる。

右足からのミドルキック。

バキッ！

僕は左腕でそれを受け止め、アロ八男の軸足に渾身のローキックをかます。

男は倒れる……はずだった。

しかし、アロ八男は軸足に蹴りをもらっても、微塵もダメージを

受けていないようだった。

蹴った感触もまるで金属でも蹴ったようだった。

アロ八男がハンドガンを持っていない左手で殴ってきた。

僕の知覚を超えるスピードだった。

みぞおちにまともに入り、またも僕は吹っ飛んだ。

口から空気と一緒に血を吐き出す。

内臓を痛めたようだ。

やはりスピードとパワーはケタ違い。

加えて耐久性もかなりあるとみえる。

持久戦はマズイ。

僕はゆっくり大きく息を吐き……そして一気に空気を吸い、息を止めた。

数瞬後、アロ八男に深々とナイフを刺した。

そして、男は倒れた。

「え……今、何をしたの？」

今まで、離れて見守っていた四条が近寄って、尋ねてきた。

「ナイフで刺しただけさ」

「最後だけすごく速くなかった？　まるで瞬間移動でもしたみたいに移動してたけど」

「本当は企業秘密なんだけど……まあいいか。刹那せつなっていう技を使っただんだ」

「せつな？」

「そう。人間は息を止めている間は普段以上の力を発揮できる。そ

れを技として昇華したのが刹那だ」

「へえ、大した仕掛けじゃないのね。まあとりあえずご苦労様。よくやってくれたわ、途中までひやひやしたけどね」

そう言つて、屈託なく笑う四条。

疲れや傷の痛みが和らいだ気がした。

……………気のせいだろうけど。

四条には言わなかったが、刹那にはデメリットがある。

それは急激な酸欠による一瞬の失明。つまり使用後に一瞬目が見えなくなるのだ。戦闘中の一瞬はとてつもなく長い。よって、刹那は一撃必殺でなければならぬ。

また、心臓にも多大な負担をかける。よって、刹那を乱用することは寿命を縮めることになる。

これらの情報は四条は知らなくても良い情報だ。

四条を自宅まで送り、明日のデート？の約束をして家路に着いた。

「お疲れ様でしたね、三神君」

自宅に着き、すぐに二岡から電話があった。

どこから情報を入手したのか、二岡は今日の出来事について全て把握しているようだった。

「それにしても三神君に刹那を使わせるとは、敵もかなりの使い手のようでしたね」

「二岡はあの青い目について何か知らないか？」

「私も噂程度にしか知らないのですが、あれは薬の副作用らしいですよ」

「薬？」

「はい。使用者の身体能力を爆発的に上げる薬だとか。最近、国内の大手薬品メーカーの梅田薬品が極秘裏に開発したものらしいです。」  
「なるほどね。どうりで素人くさい動きなのに身体能力が高かったり、化け物じみた能力を持っていたのか」  
「青い目を持つ敵には十分に気を付けてください。また何かわかり次第連絡します」

そう言って、電話が切られた。

とりあえず初日はなんとか無事クリアした。

ゲーム終了まであと二日だ。

## 第六章（後書き）

当初の予定では主人公はもっと強いはずだったんですけどね（笑）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4160u/>

---

笑顔の代わりに道化の仮面を

2011年10月9日10時51分発行